

類經本『素問』『靈樞』の付訓編刊者について

小曾戸 洋

わが国一六世紀以降における漢籍医書を受容・普及の研究は、和刻本の出版状況を調査することなしには始まりな
い。『黄帝内経』の和刻本は、慶長十三年（一六〇八）刊
『黄帝内経素問註証発微』、翌年刊『同靈樞註証発微』（馬
玄台注、梅寿刊古活字版、後印の異植字版もある）をもっ
て嚆矢とし、ついで元和間の『重広補注黄帝内経素問』
（新校正注、周曰本による古活字）、寛永五年（一六二八）
の前記『註証発微』覆刻本（道伴刊整版）等がある。

しかし、大量に印刷され、江戸時代を通じて広く流布し
活用された『黄帝内経』のテキストは、何といっても次の
二種である。

①『重校補註黄帝内経素問』（新校正注、熊宗立本）『新
刊黄帝内経靈樞』（周曰本）合刻本、寛文三年（一六六三）

吉弘玄仍跋刊本。

②『黄帝内経素問』『黄帝内経靈樞』合刻本（各九卷、
無注本）。

右の二種のうち、①はその吉弘玄仍（元常、一六四三～
九四）の跋によると、その師饗庭東庵（一六一五～七三）
の付訓になるもので、底本や刊行年も判然としている。こ
れに対し、②は末尾に「京二條風月莊左衛門」とあるのみ
で、刊年・序跋はまったくなく、その出版経緯に関しては
これまで知られていなかった。

本版（②）は従来「類經本素問靈樞」と俗称される。そ
れは本版が張介賓『類經』の和刻本（和刻本は一種のみ）
とまったく版式を同じくし、しかも匡郭頭注に「撰生類一」
といった標記を施し、和刻『類經』との相互検索の便がは
かられているからである。かつ本版の文章は従来『素問』
『靈樞』の経文に拠ったものではなく、『類經』の経文から
復元されたものとなっている。この事実は、本版が日本人
の編集になるもので、和刻『類經』とともに同一人物によ
って付訓され、ほぼ同時に刊行されたことを示している。
和刻『類經』に刊記序跋があれば、その経緯が判明するは

ずであるが、同書にもそれはない。日本における『黄帝内経』の普及を促した本版および『類経』の両版の付訓編刊者は誰か。

東条琴台原撰の『先哲叢談続編』(天保頃成、一八八四刊)の鵜飼石斎の項に次のようにある。

万治寛文之間、雖有學者、艱於獲書、不論經史百家與
醫卜積老、概以舶來者、充其考援。故翻刻之者、不及於
元祿宝永以後易於下手。石斎能識時態、以翻刻有用書為
先務。至今坊間所行、稱石斎訓点者、…張介賓素問類経、
王肯堂証治準繩…等、無慮數百千卷、皆行于世。

「張介賓素問類経」の表現は正確さを欠くが、これが当該兩版を指すことは毫も疑いない。さらに、林春斎の『倭版書籍考』(一六五二刊)の類経の項に「…点者洛陽鵜飼石斎」とあるのも、それを裏付けるものである。

鵜飼石斎(一六一五～一六四)、名は信之、字は子直。江戸の人。那波活所(一五九五～一六四八)門下の俊英で、正保三年(一六四六)尼崎藩の青山幸利に仕え、万治三年(一六六〇)致仕。京都で講説をなした。寛文四年没。医学関係の著述に『運氣論句解』がある。また『先哲叢談続

編』の記載から、和刻本『証治準繩』(寛文十・十三年刊)が石斎の付訓にかかることが知られる。

石斎の師・那波活所は藤原惺窩(一五六一～一六一九)の弟子で、その同門に堀杏庵・林羅山・松永尺五がいる。堀杏庵(一五八五～一六四二)は当時の最新医書であった『素問靈枢証發微』に着目し、馬玄台の説を究め、門弟に講義した。杏庵の医学の師は曲直瀬正純である。同門に林市之進(一六〇七～七〇)がいて、市之進と親交のあった饗庭東庵は先述のごとく新校正注本に付訓をなしている。こうしてみると、各人を結ぶさまざまな糸が見えてくる。

『類経』が中国で出版されたのは天啓四年(一六二四)のことで、寛永十九年(一六四二)にわが国に舶載されて紅葉山文庫に入ったことが『御文庫目録』に見えている。『類経』は『証發微』に続いて入ってきた当時最先端の『黄帝内経』の研究書であった。『内経』研究の流れは馬玄台から張介賓説へと移る。石斎はいちはやく『類経』に付訓をなし、かつまた『類経』の経文を解体して『素問』『靈枢』を再編成するという奇抜な作業を行ったのである。

『類経』の経文は、張介賓の考えに従って文字を変えたところがままある。だからこの類経本『素問』『靈樞』で学んだ人々は張介賓の眼というフィルターを通して『内経』を読んだことになる。これら兩版（『素靈』と『類経』）の刊行年次は特定できないが、付訓作業は石齋の没する寛文四年以前、出版は寛文年間に違いなからう。ちなみに寛文十・十三年刊の『証治準繩』とその彫刻字体は酷似しており、同一刻工グループの開彫であることが知れる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

ケシの渡来と津軽一粒金丹

松木明 知

演者は二十数年来、ケシの日本への渡来に関しての研究を続けてきた。それはケシを一成分とする津軽一粒金丹が津軽地方で製造され、全国的にも有名であったからである。

これまでの研究者の研究は、断片的であり、しかも信拠すべき史料に準拠しないものであったため、津軽一粒金丹についてもその概要しか判明しなかった。

演者は、ここ数年間鋭意研究を続けてきた結果、少なからず新しい内外の史料を集めることができ、日本へのケシの渡来、および津軽一粒金丹の研究を一步進めることができたと考えたので発表したい。

まず、日本へのケシの渡来に関しては、他の植物など多くの場合、東漸北上の原則に従うのであるが、ケシに関する室町時代以前の情報は、九州、四国、中国、関西、関東